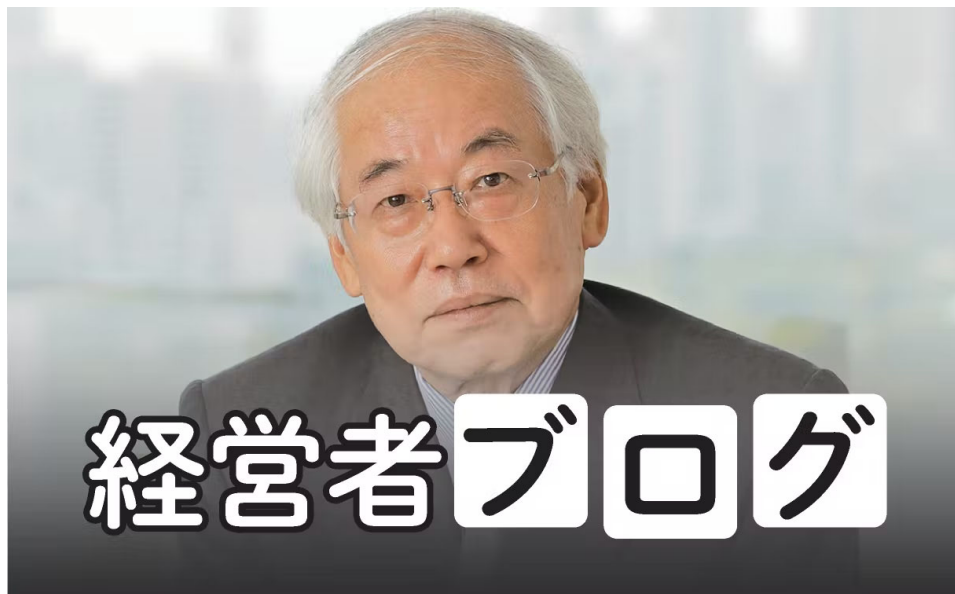


西側諸国とかけ離れてしまったプーチン氏の世界観

経営者ブログ 鈴木幸一 IIJ会長

2022/3/1 2:00 | 日本経済新聞 電子版



米国政府が繰り返し、ウクライナ国境に集結するロシア軍の戦車部隊などの正確な情報を開示し、ロシアのウクライナへの進撃を警告していたのだが、ナチスドイツがポーランドへ電撃的な占領をした時代ではないと、「まさか」という思いがあったのだ。

■「まさか」の事態が現実

第2次世界大戦から70年以上を経て、突然、大量の戦車が国境を越え、直接的な軍事行動によって、国境線を変える、他国の政策を変えようという行為を目の当たりにするとは思ってもいなかったのだが、事態は現実のものとなったのである。



イベリス

ロシアといえば、建国以来、「領土の拡張」こそが国策の根底にあった。17世紀末のピョートル大帝から、18世紀の女帝エカテリーナ2世を経て、ロマノフ朝が消えた20世紀のロシア革命に至るまで、農奴による基本的な国家の枠組みと領土拡張政策は、揺るぐことがない国家の基本戦略の骨格だった。

そのロシアには19世紀に詩人のプーシキンが出現するまで、世界に通用する文化は存在しなかったというのが、一般的な評価である。天才プーシキンが現れて以来、19世紀末にかけてロシアルネサンスとも表現される時代があり、突然、文化が花開く。ドストエフスキーやチャイコフスキーをはじめとして、世界的な作家や音楽家を輩出し、明治以降の日本の文化や芸術、そして思想面でも大きな影響を与えた国のひとつとなった。

中学時代から、授業の学習については何ら威張れた生徒ではなかった私だったが、ツルゲーネフ、ドストエフスキーなどの小説については、理解度はともかく、家にあった全集を読みふけていた記憶がある。成熟した西欧文化にはない刺激を受けて、それを理解しないまま、片端から読みふけていた時間こそ、その後、高校生になって不登校生徒となってしまった、大きな原因であると思っている。

■クリミア侵攻から8年

軍を派遣して領土を得るなど、そんな時代ではなくなっていたのだが、いとも簡単にクリミアがウクライナからロシアに併合されたのは2014年、8年前のことである。ロシアがウクライナ東部紛争での停戦と和平を定めた2015年のミンスク合意を無視、ウクライナ東部の2州について独立すべき、あるいはロシアに組み入れるべきだといった主張を繰り返し訴え続けていたのは周知の事実である。



ペゴニア

ロシアにとって国連憲章の存在など、考慮のうちにないことは改めて言うまでもない。そのロシアが問題としていた東部地域ばかりか、首都キエフをはじめウクライナ全域を軍事力で制圧しようと侵攻を始めた。そのニュースは世界の人々を驚かせたというより、軍事的な侵攻という手段によって、国家間の問題を収めんさせようとするロシアの行動について、確認をさせられたようなものである。

軍事的な圧力や行動で国境を変えようというロシアに対し、繰り返し警鐘を鳴らしていた米欧だが、ロシアがウクライナ全域に軍事的な侵攻を実施する事態となった。独裁の度を強くしているプーチン・ロシアの動きについて、米国は十分すぎるほどの情報を持っていた。一方、米欧が軍事的な対応を絶対にしないだろうと、ロシアも確信していたのである。

■制裁はどこまで進むのか

米国やドイツは、ウクライナに対し武器の供与を発表した。経済制裁などについても、一歩踏み込んだ形の対策を発表している。経済制裁は対象となるロシアはもちろんだが、制裁する側にも大きな負担がかかる。



まだ冬景色の滋賀県米原市

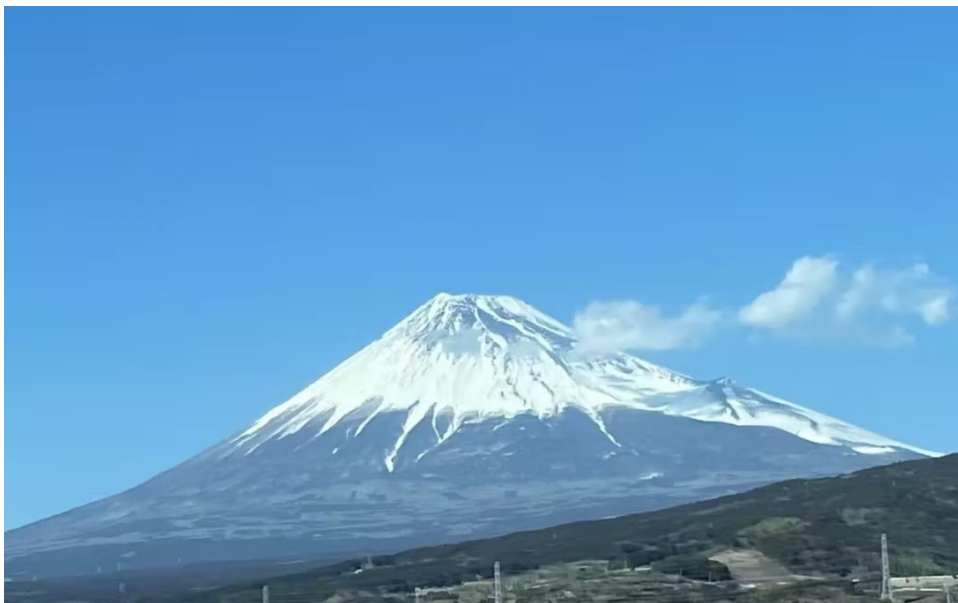
経済制裁を覚悟の上での軍による侵攻が、どのような計算に基づいて決定されたのか、専門家によれば大枠の数値は計算されていると思うのだが、素人には辛うじてメディアで報道される程度の想定される結果が頭に入るだけである。

本ブログの執筆時点では、ロシアの一部の銀行を国際決済ネットワークの国際銀行間通信協会（SWIFT）から排除する、金融面の制裁を決定したとのニュースが流れていた。ロシアからのエネルギー輸入に依存する欧州各国の事情を超えて、深刻化する事態に対応した措置であることは言うまでもない。

SWIFTからの排除がどの程度ロシアにとって打撃となるのか、専門家ではない私には概念的な被害しか想定できない。どこまで制裁が進むのだろう。

■クラシック音楽の世界でも抗議

政治的な影響力はほとんどないのだが、クラシック音楽の世界では、ロシア軍のウクライナへの侵攻に対し、演奏家をはじめ音楽界全体として、さまざまな具体的な抗議活動に関する記事が目に入る。ウィーン・フィルの米カーネギーホール公演では、プーチン氏ともっとも親しいロシア人指揮者ワレリー・ゲルギエフ氏の演奏が予定されていたが、指揮者は米メトロポリタン歌劇場の音楽監督ヤニック・ネゼセガン氏に変更となった。



新幹線から望む富士山

同時に米国におけるウィーン・フィルの5つの公演についても、ゲルギエフ氏は指揮をしないことになった。ゲルギエフ氏については2015年以来、首席指揮者となっているミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団が、同氏のウクライナ問題に対する考え

方次第では、ミュンヘン市として指揮者から降りてもらうと報じられている。

ゲルギエフ氏ばかりでなく、ロシア出身の音楽家はウクライナに対するロシアの行動に関し、自らの考えの明確な表現が要請されている。経済的な制裁とは別次元の話ではあるが、長い目で見ればロシアにとって厳しい制裁となる気がする。欧米からの別次元の制裁である。

シカゴ交響楽団の公演では、ベートーベンの第9交響曲を演奏する前に、ウクライナへの侵攻という事態と同曲の精神について、短いスピーチをして訴えたイタリアの指揮者リッカルド・ムーティ氏の話も印象的だった。

「欧米人の心理や政治力学を理解できなかったプーチンは、（旧ソ連時代の書記長だった）ユーリ・アンドロポフやKGB（旧ソ連国家保安委員会）の上司と同じように『最悪のシナリオ』を考えた。その結果、プーチンの世界観は外部の観測筋が思いもしないほど80年代のソビエト世界の世界観へと近づいていった。今や、プーチンの世界、そしてロシアの世界は西側諸国とはかけ離れた世界になってしまったのだ」（「プーチンの世界『皇帝』になった工作員」フィオナ・ヒル、クリフォード・G・ガディ共著）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.